Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-07-27

シンガポールにおける社会学の現状 : ピーター・S・J・チェン教授に聞く（海外の社会学）

チェン, ピーター
北原, 淳

(Citation)
社会学雑誌,7:120-124

(Issue Date)
1990-03-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010783

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010783

海外の社会学

シンガポールにおける社会学の現状
――ピーター・S・J・チェン教授に聞く――

ききて　北原　淳

――神戸で開かれた第四回アジア社会学会（一九八四年）以来のことで、お久しぶりです。先生はその前にも神戸大学社会学専攻の学生に特別講義をしていただいたことがありますし、神戸とご縁がありますね。

(答) そうですね。

――実は、今日お訪ねしたのは、シンガポールの社会学の現状を先生から直接うかがいたかったからです。実は日本のある社会学辞典の企画で世界各国の社会学の現状を調べており、私が東南アジアの社会学の現状を調べることになっております。シンガポール大学のエディー・クオ教授にはアンケートで答えていただいたのですが、もう少し詳しい事情を知るため、先生の所にやって参りました。

まず、シンガポールには全国的な社会学会はありますか。あるいはフィリピン以外の東南アジアの国々のように社会科学全体の学会しかないのでしょうか。

(答) 専門の社会学者が構成する社会学会のような組織はまだありません。社会科学全体の社会科学・学会というのもありません。シンガポール大学の社会学専攻の学生が組織する『シオロジー・ソサイアティー』という組織はありますが、これは研究者の組織ではありません。

――現在シンガポールには専門的社会学者は何人くらいいるのでしょうか。

(答) 難しい質問ですね。まず、シンガポールでは、旧南洋大学とシンガポール大学が一つになって国立シンガポール大学が発足してから、社会学を教えるとこ

ろは、この国立シンガポール大学の社会学科（department of sociology）しかありません。現在、教授から講師まで教授スタッフは三二名おりますが、彼らは専門的社会学者です。このほか官庁では、社会福祉、住宅関係、国防省、内務省、人口関係には調査セクションがあり、そこでは社会学の専門的調査、研究をしている人がいます。その数は推定ですが、おそらく一〇〇人程度でしょう。以上の専門家に民間の企業に働く学位取得者も加えると、専門的社会学者はおよそ一五〇人程度と思われます。

——国立シンガポール大学には大学院はありますか。

（答）もちろんあります。修士課程と、博士課程がありますが、在籍学生数は両方あわせて、一五人くらいです。このうち、博士課程在籍者は三、四人のみです。これまでに四人の博士学位授与者を出しました。

ピーター・チェン（Peter S.J.Chen）
ワシントン大学にてPh.D.取得。
現在、シンガポール国立大学（National University of Singapore）教授
Southeast Asian Journal of Social Science 編集長
編著書に Studies in ASEAN Sociology, Singapore,1978など。

——貴学の社会学専攻の学部学生数はどのくらいですか。

（答）一年生は四五〇名おりますが、四学年全体では一二〇〇名以上になります。ただし、本学は二専攻制度をとっていますので、この学生数は主専攻、副専攻をあわせた総数です。社会学を主専攻とする学生だけですと、およそ六〇〇～七〇〇名くらいです。二専攻制ですから、学生は、たとえば社会学と経済学、社会学と政治学といった具合に二つの学問を専攻します。この二〇年間シンガポールでは社会学が大変ポピュラーになりましたので、社会学の志望者が多く、入学後さらに特別の選抜試験をします。

——さきほど先生は教授スタッフは三二名だとおっしゃいました。わずか三二名の教師で一二〇〇名もの学生を教えるのは大変な負担ですね。

（答）主専攻の学生数はその半分です。それに、もちろん、非常勤の教師を頼みます。非常勤の教師は五名から一〇名くらいです。我々の週平均授業担当時間は一〇時間を下りません。

——一〇時間の内容はどうでしょうか。

（答）我々のシステムは日本やアメリカとはちがい、講義制度とチューター・システムを組み合わせたシス

テムです。講義を主体とする日本のシステムはアメリカによく似ていると聞いています。我々の場合、まず大教室での講義がありますが、これは一学年の場合は四〇〇名くらいの規模になることもあります。二つにわけて二〇〇名の規模です。しかし二年生以上ですと、七〇名から一五〇名くらいの規模です。この講義の比率は教師一人当たりの負担時間一〇時間のうち二時間ほどです。チューター・システムの方ですが、これは何百人もの学生を少数のグループにわけますので、一グループは八名ほどになります。一〇〇名の規模ですと一二グループくらい出来るわけです。この小人数グループを常勤と非常勤の教師が担当しますが、これが負担時間一〇時間のうち八時間を占めて、こちらが主体となります。

——それは、学部生の教育のことですね。

(答) もちろんこれは、大学院生ではなく、学部生の教育の話です。日本でいうゼミナールに近いものだと思いますが、我々の場合は、この比重が講義よりもはるかに大きいわけです。

——話題は変わりますが、シンガポールには有名な外国人の社会学者はいますか。私の知っているのは、エバース（Hans-Dieter Evers）くらいのものですが。

(答) エバースのほかリアス・ハッサン（Riaz Hassan）が有名です。ハッサンはエスニシティー、人口問題等について調査してます。今はオーストラリアに移りましたが、かつてシンガポールで非常に活発に調査を行い、まだシンガポールに関心をもち続けています。

——シンガポールの社会学者の特徴はどんな所にありますか。たとえば、パーソンズ、ウェーバー、デュルケームといった有名な社会学者の学説研究、理論研究を専門にするようなタイプの社会学者はいるのでしょうか。あるいは、他の東南アジアの国々の社会学者に特徴的なように、そのような専門分野をあまりもたず、むしろ理論から、実証まで幅広く、一般的に社会学の諸分野を研究するのでしょうか。

(答) そうですね。こういうことができるでしょうか。ある社会学者は理論的分野を専門にしているといえますが、しかし、彼らはアメリカのパーソンズ等の理論家のように理論のための理論を純粋に追究するというような意味の理論社会学者ではありません。そのような意味では、一般的に言えば、シンガポールの社会学者は多少ともジェネラルな社会学者が多いといえます。しかしもちろん、各自の専門はあり、ある者は

理論を、ある者は都市計画、社会政策を専門にするといった具合です。

——西欧の社会学者のように理論だけに専念できるアーム・チェアー（安楽椅子）の身分でないということでしょうか。応用的社会学が多いということでしょうか。

(答)「応用社会学」は全く別の意味ですから、それにはあたりません。周知のように社会学というのは理論の実証的な裏付けを重視する経験科学的な伝統をもっています。ですから我々は社会調査を非常に重視するわけですが、それは理論を社会調査に応用する、あるいは社会調査によって検証する必要がある、と考えるからです。理論が豊かになるためには調査が必要です。理論は理論として、調査と切り放してしまうのは良くないことだと思います。日本へ行ったとき、日本には理論だけを研究する社会学者と調査だけを行う社会学者とがいると聞きましたが、私は両方を重視しなければならないと思います。

——シンガポールでは外国はどこの国の学位取得者が多いですか。

(答)アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアの四カ国です。とりわけアメリカの学位取得者が多いですね。

——すると方法論的には構造機能主義の影響が強いのでしょうね。あるいは若い人にはラジカルな社会学、たとえば、従属理論の影響が強いのでしょうか。シンガポールの社会学の方法論的な状況はどうなのでしょうか。

(答)わが国では、そのような方法論的分類をしてどれが主流かということは難しいですね。しかし、ラジカルな方法論の人はほとんどいません。マルクス主義そのものの人もいません。また構造機能主義はたしかに戦後の主流的傾向ですが、これもそのものずばりの人もいません。我々は種々の方法論を組み合わせてそのときに応じて使います。ですから、どのような方法論が主流かといわれても答えられません。そもそもアメリカでも方法論は多様化しており、どれが主流かということは言えませんね。私自身は何派でもなく、方法論的には自由です。

——先生は大学の社会学科ではどんな科目を教えておられますか。

(答) そうですね、社会政策、社会計画、社会階層、近代化、東南アジア社会学、等です。

——社会階層といえばマルクスとかダーレンドルフとかギデンスとか、いろいろな立場の社会学者がいるわけですが、どれか特定の人を詳しく教えるのでしょうか、それともいろんな人の説を概説的に教えるのでしょうか。

(答) それは後者です。とくに低学年の学生にはいろんな立場があることをひろく教えます。とくに特定の理論体系、方法論に偏ることなく、多元的に中立的な視野から教えます。

——よくわかりました。ところでシンガポール以外の、マレーシア、インドネシアの高名な社会学者を教えて下さい。というのは私にはその方面の情報がまったくありませんので。

(答) インドネシアについては、私と共編で『文化と工業化』という本を作ったスロ・スマルジャン(Selo Soemardjan) が第一人者でしょう。彼はかつてインドネシア大学におりましたが、いまは官庁にいるはずです。マレーシアではサイフッセン・アーリー(Saihoosen Aii)、アブドゥル・バドール(Abdul Kahar Bador) それにサイフッセン・アラタス (Saihoosen Alatas) です。サイフッセン・アラタスはかつて、本学のマレー研究の主任でした。いまはマレーシア大学のVice Chancellorです。これは英国流のシステムですが、日本で言えば実質的には学長に相当する地位です。彼は近代化の理論が得意であり、「近代化と政治的腐敗」等の著書があります。

——マレーシア、インドネシアには社会学会はあるのでしょうか。フィリピンにはあると聞いてますが。

(答) フィリピンではアメリカ人の社会学者の影響で社会学会ができてますね。マレーシア、インドネシアはあると聞いたことはありません。ないと思います。

さあ、大体よろしいでしょうか。これからシンガポール大学の同窓会のレストランへいって食事にしましょう。

一九八九年一〇月九日
国立シンガポール大学にて